

従業員の皆さんへ

恩師の変化に見る がん医療の進歩

知ってトクする 職域がん対策—vol.8



東大医学部時代に解剖学を学んだ恩師の養老孟司先生が小細胞肺がんを罹患し、昨年、抗がん剤と放射線治療を受けられました。

肺がんは、「小細胞肺がん」とそれ以外の「非小細胞肺がん」に大きく分けられます。顕微鏡で見ると、がん細胞が丸くて小さいことが、小細胞がんというネーミングにつながっています。非喫煙者にも多い「腺がん」が非小細胞肺がんの代表です。一方、小細胞肺がんは喫煙者に多いタイプで、非小細胞肺がんよりも増殖のスピードが速く、転移や再発をしやすい厄介ながんです。

喫煙者に多い厄介な肺がん

小細胞肺がんの特徴	
増殖のスピード	速い
転移・再発のしやすさ	しやすい傾向
喫煙との関連	喫煙者に多い



ヘビースモーカーとして知られる養老先生ですが、長年の喫煙が発がんの原因となりました。残念ながら、今年の春に再発し、東大病院で治療を続けています。

その治療経過などをまとめた私と先生の共著「病気と折り合う芸がいる」(エクスナレッジ)が今月22日に発売されました。この出版社での共著は4冊目となります。2020年に先生の心筋梗塞を私が診断し、緊急治療を受けてもらったことがきっかけで、「養老先生、病院へ行く」、「養老先生、再び病院へ行く」が生まれました。その後、24年に小細胞肺がんが発覚して、3冊目「養老先生、がんになる」を出版しました。いったんはほぼ消失したがんがこの春に再発し、今回の新刊出版に至りました。

養老先生の原稿を読んで驚いたのは、医療との距離がグッと近くなったことです。かつては医療に否定的だった養老先生が、東大病院での自らの治療のことをおもしろおかしく語り始めたからです。タイトルの「病気と折り合う芸」とは、そういうことなのだと納得しました。





例えば、養老先生は4回入院し、抗がん剤+「免疫チェックポイント阻害剤」による治療を受けました。その後は、免疫チェックポイント阻害剤の点滴のみを外来で受けています。外来での点滴は初めての経験なので、それがおもしろいと述べています。また、連載でも述べましたが、「家族のために治療を受ける」という言い方を、この本でもしています。養老先生の変化が感じられます。

養老先生が変わった理由の一つに、医療の進歩があると考えています。以前は、抗がん剤の副作用が激しく、途中で治療をやめたケースや副作用で命を落とした患者も少なくありませんでした。しかし、副作用はまちがいなく減っていますし、全身転移があっても薬物治療を続けながら、5年以上元気に過ごしている方も増えています。

逆に、耐えられないほどつらい治療であれば、養老先生はご家族に治療をやめると宣言していましたでしょうし、ご家族もそれを受け入れたと思います。肺がんの治療を通して、養老先生とご家族とのきずなが強くなったと感じています。養老先生は「『一人称の死』が存在しない」と語りますが、同じように、「病気も自分だけのものではない」と気づかれたのだと思います。

養老先生はかねてから、「変わらない自分」など存在しないと言われますが、肺がんという新しい経験を通して、先生も変わったのだと思います。東大病院がホスピタリティにあふれる「よい病院」に生まれかわり、がん治療の副作用もほとんどなかったことは、先生の変化を後押ししたはずです。

医療の進歩

昔



- ・抗がん剤の副作用が激しかった
- ・途中で治療をやめたケースや副作用で命を落とした患者も少なくなかった

今



副作用は昔に比べて減っており、全身転移があっても薬物治療を続けながら、5年以上元気に過ごしている方も増えている



中川 恵一（がん対策推進企業アクションアドバイザリーボード議長）

東京大学大学院医学系研究科 総合放射線腫瘍学講座 特任教授、厚生労働省 がん検診のあり方に関する検討会元構成員
がんの緩和ケアに係る部会座長、文部科学省がん教育のあり方に関する検討会委員など。

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部放射線医学教室専任講師、准教授を経て現職。緩和ケア診療部長、放射線治療部門長などを歴任。
著作には「がんのひみつ」「コロナとがん」などがんに関する著書多数。日本経済新聞でコラム「がん社会を診る」を連載中。



YouTube

「オトナのがん教育」講座 「教えて中川先生!がんって何?がんになっても働けますか?」

好評配信中!